

舞い扇かざしひらりと春を呼ぶ

平田 とき

美しい句である。踊っている女性には一言も触れず、扇のみに焦点を絞ったのがよい。これが俳句の骨法のひとつである。教科書的に言えば、擬態語はあまり使わない方がよいかも知れないが、この〈ひらりと〉は利いていると思う。杓子定規にゆかないところが文芸。そこまで来た春が見えそう。(枕)

羽根のように息吐きなさい春が来た

豊山 千蔭

八戸市在住。「寒雷」所属。詩人は、普段着の言葉を詩語に変換して己の感性を披露するが、これは口語世代に戻れた作者の内なる声。掲句の羽根は多解だが、「なさい」などと命令できるのは我をおいてない。「急くな、アダー」が「ジョ」が作者の春への・人生への処方である。(光)

根元から春の始まるりんご園

大瀬 響史

樹木の生命力を感じさせられる一つに、春先雪が大分少なくなった頃、根元の回りの雪が消えてそこだけ黒くなるという現象がある。幹に熱があるとということだろう。これを最も目にするのがりんご園である。妙に尤もらしい表現をせず、〈春の始まる〉と直截に述べ成功した。こねくらない良さ。(枕)